

ノー・ファーニチャー

高山憲之

ボストンから車で二時間ほどのところにケープコッドという保養地がある。一九九七年の六月、そこで催された会議の合間をぬって家族とともにホエール・ウォッチング（くじら見学）を楽しんだときのことである。

宿泊先のホテルとクジラ見学集合場所の間を手配の車で移動していただき、話好きの運転手と四方山話をしていた。その運転手は日本に数年前に一度来たことがあり、そのとき親しい友人の家に招待されたという。

その友人の家はタタミと障子でできた和室のある、我々日本人にはごく普通の家だったらしい。その家を称して、彼の口をついで出た言葉が「ノー・ファーニチャー」の二語であった。（見るべき）家具がなに一つない　この言葉は、私の脳裏に今も深く刻みこまれている。

かの運転手は、すわるべきイスが一つもなく、身のおき場がなかったことのとまどいを、その二語で表したかっただけかもしれない。しかし、ひるがえって我が家に「家具」というにふさわしいものが用意されているだろうか。

ヨーロッパのしかるべき家には家族伝来の机やイス、じゅうたん、カーテン、時計、食器や調度品、戸棚や本棚、装飾品等が備わっている。ビスコンティ監督の映画「家族の肖像」（原題はザ・カンバセーション・ピース）をみると、なにげないカメラ・ワークのなかにそのような家具が映し出され、落ちつきと安定感のある独特の雰囲気がかもしたされている。

一方、我が家には子供や孫に伝えて残すに値するような家具はほとんどない。テレビや音響機器、本や書類の山に囲まれて我が家は雑然としている。次々にモノを買い、家中にモノがあふれかえっているような気分にもなるが、さて子供や孫に残すだけの価値があるものがどれだけあるかということになると、ガラクタばかりだからである。

彼我の違いは住宅の耐用年数の長短や湿気の高低などで説明できる部分もある。しかし時間感覚や生活習慣も随分ちがう。新しいものがり屋で、古いものは良いものも悪いものも捨てていってしまう。我々、日本人の心のありようと「ノー・ファーニチャー」というカルチャーはどこかで通底しているように思えてならない。

子供や孫に残すべきものがないという状況は、今日、モノだけでなく精神の次元にまで及んでいるのではないだろうか。テレビ世代の子供を前にして子育てに自信を失っている親が少なくない。自分が育てられたようには子供を育てることができない
いわば「自転車操業の子育て」を強いられ、日々頭を痛めたり、子供を鍛えることを放棄したりしている親が日本にはふえてきた。子供や孫に伝えて残すべき人間の生き方、モラルさえ伝えていないのである。

ノー・ファーニチャーという日本人の立ちい振る舞い。このようなことをつづけていてよいのか考えさせられる昨今である。